

巨樹・巨木シリーズ32 4月号 宮城県-2

細田木材工業株式会社
顧問 細田 安治

宮城県は南北に伸びた細長い地形、中央部には仙台平野が広がり、西側には蔵王、船形、栗駒などの山々が連なる。山間部は寒さが厳しい一方、平野部は温暖なため、気候の地域差が大きい。このような地形にはどんな巨樹があるのか、ワクワクしてくるほどだ。資料提供してくれているU氏の足跡を今号も辿る。

<賀茂神社の三本の御神木>

仙台市にある賀茂神社は三本の由緒あるご神木を有する荘厳なご神域だ。境内には、樹齢推定200年、神社のシンボリックな存在のタラヨウ(多羅葉)やアラカシ(粗榧)、イロハモミジの三本の巨樹がある。以下、順にご紹介する。

写真番号1 樹番号8 賀茂神社のタラヨウ(三本の御神木のうちの1)

樹齢推定200年以上、樹周3.4m、樹高17m 宮城県仙台市泉区古内糺1
宮城県指定天然記念物

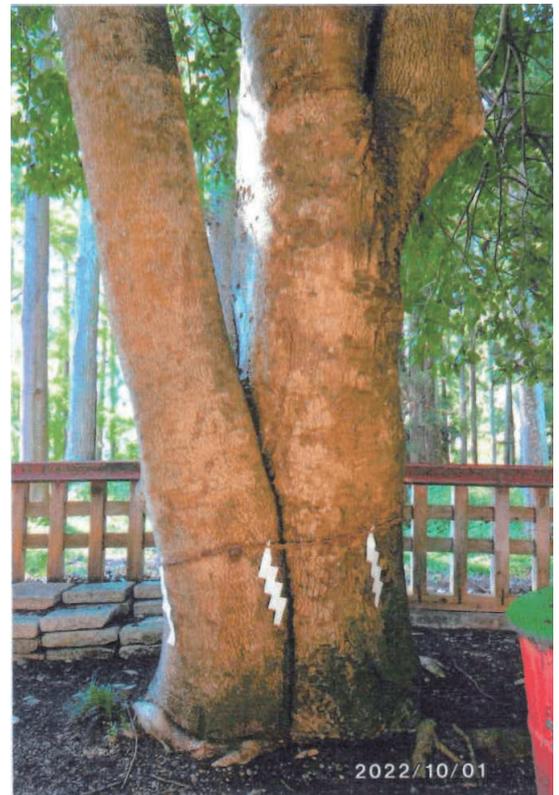
*仙台市教育委員会の案内板、ネット情報を参照して。

タラヨウは静岡県以西の暖地に生息する常緑広葉樹である。植栽可能な北限地帯において、この樹ほど樹勢が旺盛な大木が見られるのは実に珍しくまた貴重なものとして尊重されている。

このタラヨウは地際から高さ1.4mのところまで2本に分かれている。株の根元の周囲は3.4m高さ1.4mの幹周囲は2.4mである。南側の幹周囲(地上1.5m)は1.04m、北側の幹周囲(地上1.5m)は2.34mであり、樹高は17mである。樹齢は200年以上と推定される。

タラヨウは、本来山地の林内に自生する高木で、大きくて艶のある葉と秋に実る赤い果実を特徴とし、各地の庭園や公園、街路にも植栽される。

また「はがきの木」とも言われているのは、タラヨウの葉の裏を傷つけると、その部分が黒くなる性質があり、これを使って文字や絵などをかくことができる。まるで



写真番号1 賀茂神社のタラヨウ

マジックペンのようなものである。葉書きの語源になったともいわれている。「郵便局の木」に制定された。

漢字では「多羅葉」だが、この由来は、紙の貴重な時代に、インドにおいて経文を写していた「多羅樹」から来ている。

またこの地のタラヨウは二本並びで、スラリとした姿は、穏やかな優しい女性を思い起す雰囲気がある。この木は植栽樹として貴重な存在の木とみたが、一方、用材として見れば柔らかそうな材質ではないか。造作材や家具用の資材か、また、もしかしたらホウの木のように、彫刻刀を使う工作物などでも使えそうな軟らかい材質とみたがいかがなものか？

<筆者のつぶやき>

タラヨウとは？初めて聞いた。「もくざいや」などと自負しているも自分の知っていることなどたかが知れている。ここでまた一つ「学んだ」と自戒しなければならない。さてそのタラヨウとはネットで調べるとすぐに出てきた。これも驚きだ。知らないのは自分だけか。

賀茂神社のアラカシ（三本の御神木うちの2）

（*残念ながらアラカシの写真はないが、この木の大きさなどをご紹介します）

樹齢左右いずれも200年以上、右側：樹周3.9m、樹高11m 左側：樹周16m、樹高12m 仙台市泉区古内字糺 仙台市指定天然記念物、保存樹木

*ウィキペディア、仙台市教育委員会案内板を参照して。

アラカシは、温暖地帯の山野に生育する常緑広葉樹。ドングリのなる木で、秋に熟す。別名で、クロガシ、ナラバガシ、ホソミノアラカシ、ヒロハアラカシ、ナガバアラカシともいう。山陰地方で「カシ」というと、一般に本種アラカシを指す。その分布は広く、宮城県以南の本州・四国・九州に及び、宮城県は分布の北限に当たる。

賀茂神社のアラカシは、拝殿前の東西に2本あり、東側の1本は、幹は西側に屈曲し、高さ1mくらいまでは空洞になっている。樹齢はいずれも200年以上と推定され、アラカシの北限地帯における古木として珍しい。

<筆者のつぶやき>

アラカシとはどんぐりがなる木を言う。これも筆者の知識にはなかった。今号は知らぬことだらけ、どんぐりで知っていることと言えば櫟の木的一种であること。子供時代に教えられたことは、どんぐりを食べると「言葉がつまってしまう」「鼻に入れると取れなくなるので入れてはいけない」である。

用材として使われることがなかったので、せいぜいこの程度しか知識がなかった。用材にならない立ち木の知識の貧弱さに自分でもびっくり驚きだ。今号ではタラヨウに次いで、二種類目である。教えられることが多い。

写真番号2 樹番号9 賀茂神社のイロハモミジ(三本の御神木うちの3)

樹齢150年以上、樹周2.8～3.5m、樹高16m 仙台市泉区古内字糺 宮城県指定天然記念物

*宮城県ホームページより。

賀茂神社の表参道の石段を上ったところの東と西にある。このイロハモミジも本来福島県以西に分布する落葉広葉樹で、県内に自生は認められず、植栽されたものである。植栽されたイロハモミジのなかでは、樹高、樹勢ともに最も優れている。

<筆者のつぶやき>

資料提供者のU氏の訪問時期は、残念ながら秋ではなかったため、このような写真となっている。紅葉時期にはさぞかし目の覚めるような美しさを見せてくれるのではないかと訪れてみたい名樹の一つだ。

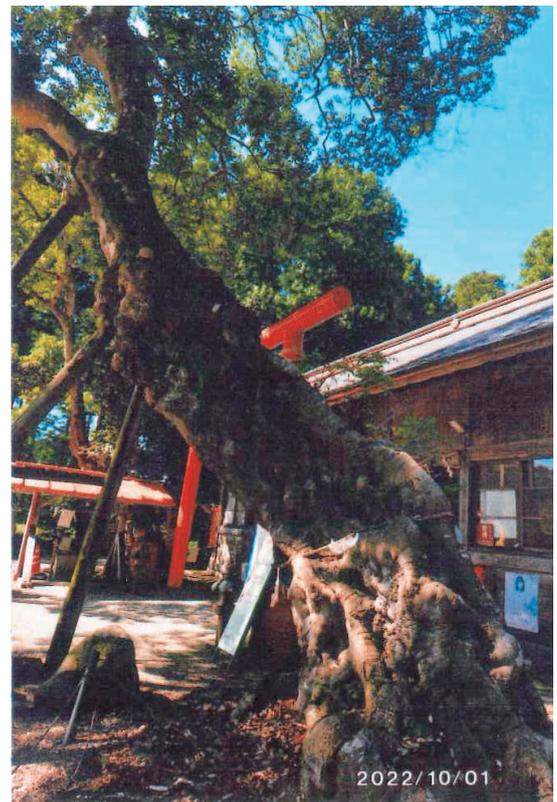


写真2 賀茂神社のイロハモミジ

写真番号3 樹番号11^{にぎたけ}苦竹のイチョウ

樹齢1200年以上、樹周7.8m、樹高32m 宮城県仙台市宮城野区銀杏町 所有者永野氏(管理団体仙台市)、国指定天然記念物

*ネット情報を参照して。

樹齢1200年以上とも言われている苦竹のイチョウは、天平時代に聖武天皇の乳母の遺言で植えられたという伝説がある巨木である。大正15年には、国の天然記念物に指定され、町名がこの木にちなんで「苦竹」から「銀杏町」と変えられたほど、地域の人たちに親しまれている。

また、このイチョウは、木の根(木根・乳柱)が乳房のように垂れ下がり「乳イチョウ」とも言われている。地域の人たちは「母親の母乳がよくでて子ども達が病気せず健康で大きくなりますように」と祈願する人も多い。

秋には美しく黄金色に染まり黄葉の名所として地域の人々を楽しませている貴重な存在だ。

<筆者のつぶやき>

このイチョウは見るからに貫禄充分で数多く垂れ下がる木根に守られどっしりと根を下している母体のような巨樹である。更に高さの半ば辺りから、力強い太い枝を

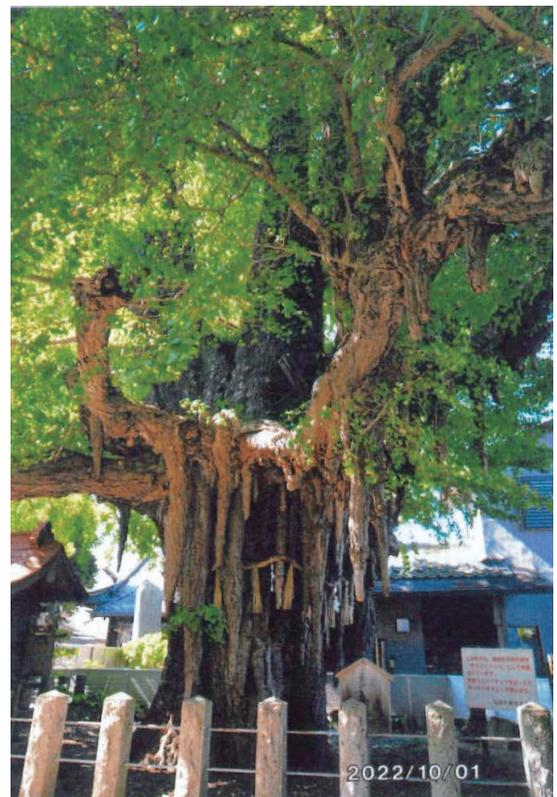


写真3 苦竹のイチョウ

腕のように広げている。木幹もほぼ同じ位置からいくつかに大きく分かれている。幹の一本が真横に伸びて砲台から大砲が備わっているような感を受けた。これは古代の闘う神を思い起す巨樹ではないか。今までU氏の探訪にでてきたイチョウのなかで最大であると思う。更に単に大きく、歴史あるに留まらない厳粛な物語を秘めた巨大なイチョウの古木であり巨樹、名樹ではないか。感動した次第である。

写真番号4 樹番号18日根牛の大クリ

樹齢推定350年、樹周5.6m、樹高10m 宮城県登米市登米町日根牛字湧小路 宮城県指定天然記念物

*宮城県ホームページより。

真田憲三氏の敷地内にあるタンバクリ(丹波栗)である。幹は右に大きくねじ曲がり、八方に枝を広げている。樹勢は盛んで、毎年開花結実する。学術上貴重である。

<筆者のつぶやき>

原産地は兵庫県丹波のタンバクリで、食用として植えられたものらしい。飢饉に備えて移植されたものではないだろうか。移植された食用樹ならば優しい樹相と予想していたが、ドッコイ、予想を乗り越して大きなショックを受けた。

このクリの木は、樹周約6mで幹全体に大蛇が巻き付きこのクリの木を締め付けている。絞められた大木はのたうつように左回りに大きく捻じれ、幹は苦し気に大きなしわを持ち、これが恐ろしい形相となり、見る人に迫ってくる。

このような強烈な力で木が痛めつけられている有様は見たことがない。地獄を見たような強烈な衝撃を受けてしまった。このショックは筆者だけだろうか？凄い迫力である。

このクリのある宮城県「登米市登米町」は、同じ漢字で市は「とめ」、町は「とよま」と読む珍しい難読地名である。探訪者U氏のフリガナから、このような地名が存在するのか？とネットで調べたがこれが難物で簡単に出てこない。何度かチャレンジし、やっとの思いで、地名の由来にたどり着いた。脱線だが、ご紹介したい。

<読み方の違いと由来>

同じ地域で読み方違いになったのは、廃藩置県によるものである。

- 登米町：「とよままち」と読む。

城下町としての旧町名の地元の施設や歴史的な脈では「とよま」と呼ばれる。由来はアイヌ語の「トイ・オ・マイ(食用土のある場所)」や、北上川を米が登った「米登(よねのぼり)」など諸説ある。

- 登米市：「とめし」と読む。2005年の合併で誕生。広域的な行政単位や県・国の施設(登米警察署など)は「とめ」と読む。

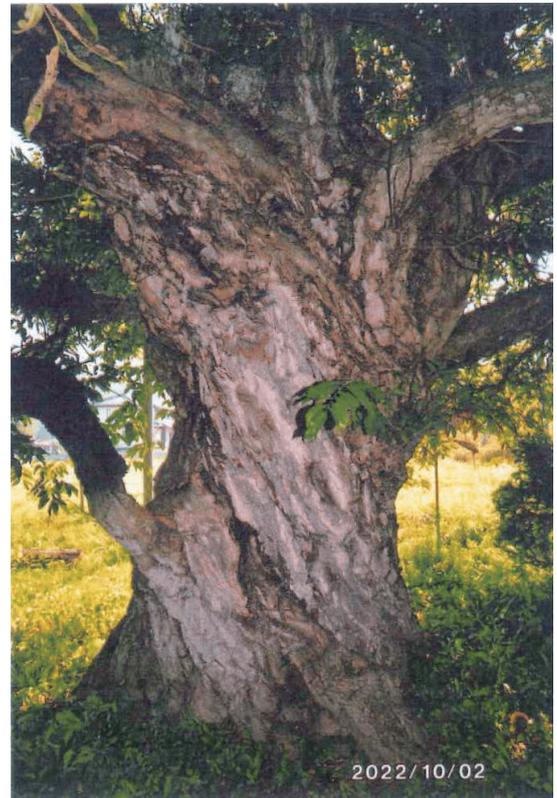


写真4 日根牛の大クリ